
始まりは...

ありま氷炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

始まりは…

【Nコード】

N8983P

【作者名】

ありま氷炎

【あらすじ】

香港で働く藤宮ノボルは女とまともに付き合うことがない。しかしクリスマスの夜に出会った女は違った…*ブログで完結後、なろうへ掲載します。

始まりは… 1 12月25日ー26日(前書き)

この話も実は「南国の魔法」つながりなのですが、年末に話が書きたくて「南国の魔法」を読んでいなくてもまったく普通に読める短編を書きました。

全6話なのでどうぞ。18禁ではないのですが大人の恋愛です。

始まりは… 1 12月25日ー26日

クリスマスか…

誰が恋人と過ごす夜なんて決めたのか…

藤宮ノボルは薄暗いバーのカウンターでウィスキーの入ったグラスを持ちながらそんなことを考えた。
香港に来て3年がたとうとしていた。

この街の人の多さやごみごみした感じにはすでになれ、人々の生き生きとした様子を見るのがノボルは好きだった。

俺がすでに忘れた情熱って奴がこの街にはあるよな。

ぐいっとグラスに少し残っているウィスキーを煽るとふとノボルはカウンターの右端に座る女に目がいった。

黒髪のショートヘアで小さな真珠のピアスをつけている美しい女だった。

女は気だるそうに小さなグラスを傾けている。

いい女だ。

俺の好みの。

ノボルは35歳になるが結婚など考えたこともなかった。子供なんてごめんだった。

女と一緒に暮らすなんて面倒極まりない。

好きなときに会って、抱くだけで十分だと考えていた。

「Excuse me . Can I get you a dr

ink?」

ノボルは女の横に座りながらそう聞いた。中国語も広東語も話せないのでノボルは英語を使って香港で暮らしていた。

女は鋭い視線をノボルに向けた後、値踏みするように見つめた。そしてため息をついた。

「いいわよ」

女から返ってきたきれいな日本語に少し驚いた顔を見せると女は妖艶に微笑んだ。

「暇だから、付き合っただけあげるわ。」

「あんた、名前何ていうんだ?」

ノボルはベッドに腰掛けて煙草をふかしながらそう聞いた。体の腰回りにタオルを巻いた姿で髪はまだ濡れていた。

ベッドの中には気だるそうに毛布に包まる女がいた。女は煙草の臭いに顔をしかめながら視線だけをノボルに向けた。

「名前なんていらなんでしょう?私もあなたも一夜だけの関係だし」
女はそう答えながら立ち上がった。美しい肢体があらわになる。女はその身にタオルも纏うこともなく、バスルームに歩いていった。

バーで飲み明かして、そのまま近くのホテルに駆け込んだ。
お互い欲望のまま抱き合った。

女は日本人ではない。日本語は完璧なものだが時々発音が奇妙だったり、その仕草がどうみても日本人ではなかった。

まあ、どうでもいいか。

そんなこと。

ノボルは吸い掛けの煙草を灰皿に押し付けてもみ消した。

シャワーを浴びたのにまだ体が女を欲していた。

いい女だ。

ノボルはベッドにごろんと体を預けた。

ベッドの横にある時計が26日になったことを示していた。

26日、通常であれば会社は休みなのだが、ノボルはホテルから自宅に帰る気がせず、事務所に来ていた。

事務所は真っ暗で従業員がクリスマス休暇をとっているのがらんとしていた。

ノボルは照明を最小限に点け、パソコンの電源を入れ、椅子に座った。

するとまもなく携帯電話が鳴った。

「武田か？おう、南国のクリスマスはどうだ？」

電話をかけてきたのは部下の武田タカオで中国人スタッフのメイリンとシンガポールに出張中だった。

「ああ？今日帰る？皆休暇とってるぞ。お前もゆっくりしてきたらどうだ？有給？ああ、そうだな。わかった」

部下のタカオは軟派な外見の割にはまじめに仕事をする男だった。

日本で取引先の会社に勤めていたが私情のもつれでやめて香港に来ていた。一人の女のためにキャリアをすべて捨てた男だ。興味があつて雇った。

「俺には考えられんがな」

誰ともなくそうつぶやくとノボルは煙草に火をつけた。

女のためか。

ノボルはふとそう考えて、朝まで一緒にいた女の顔を思い出した。携帯番号でも聞いておくんだった。気の強い女だった。

電話をしてももう一度ノボルと会いその腕に抱かれるとは思えないが、ノボルはもう一度抱きたいと思った。

そんな自分に苦笑してノボルは起動したパソコンに目を落とした。

会社は休みでもやることはたくさんあった。

始まりは… 2 12月27日

「藤宮さん、すみません。ここでしばらく待ってもらってもいいですか」

日系会社への年末の挨拶めぐりの途中でタカオはそう言った。

「ああ、いいが。どれくらいかかりそうなんだ？」

「5分で大丈夫です。上杉：彼女の会社がこのビルに入ってるんです。ちよつと渡すものがあるので」

タカオは少しぎこちなく笑いながらそう答え、エレベーターに乗るために再度ビルの中に入っていった。

ノボルは苦笑しながらタカオの後ろ姿を見送り、灰皿のある場所を見つけると煙草をふかした。

ご苦労なこつた。

タカオが単に彼女に会いに行ったことくらいわかっていた。

どういうわけがタカオは彼女に関することでは仕事を犠牲にするこ
とがたまにあつた。

まあ、5分くらいいいか。

次のアポにはまだ時間はある。

ソファに腰掛け、煙草をふかしていると見覚えのある女がこつちへ
歩いてくるのが見えた。

体にフィットしたスーツを着て、ノボルにその美しい肢体を思い出
させた。

女もノボルに気がついたらしい。眉をひそめると体の向きを変え、
ふたたびエレベーターに乗るためにビルの中に戻ろうとした。

「待ってくれ！」

ノボルはそう叫び、走り寄って女の腕を掴んだ自分に驚いた。女は

明らかに迷惑そうな視線をこちらに向けた。

「すまん。」

ノボルはあわててそう言うのと女を掴んだ手を離した。女は鼻を鳴らすときびすを返した。

前方にエレベーターから降りてきたタカオの姿が見えた。タカオは昇降口で女の顔を見ると声をかけ、一言二言話すと手を振り別れた。女はそのままエレベーターの乗り上の階へあがった。

武田の知り合いか？

「藤宮さん、お待たせしました。すみません」

タカオが穏やかな笑顔を向けてそう言った。

「武田、さつきすれ違った女は知り合いか？」

「女？ああ、ジュデイのことですね。彼女の上司なんですよ。まあ、上司の前に大学時代の友人だったんですが」

ノボルはタカオの説明を聞きながら女が去った方向を見ていた。

「ジュデイがどうかしたんですか？」

タカオは怪訝そうな視線を向けたがノボルは何も答えなかった。

くだらんな。

ノボルは手の中の名刺を見ながら苦笑した。タカオから彼女 上杉カナエの名刺を貰った。そしてその名刺に書いてある番号を先ほどから何度も見ている自分がおかしかった。

女などたくさんいるのに。

一夜だけの相手だ。

ノボルは手の中の小さな名刺をくしゃくしゃに折り曲げるとごみ箱

に入れた。

「パーティー？」

「そうです。うちで小さなパーティーを開くんですよ。まあ、忘年会みたいなものです。メイリンたちにはすでに声をかけてますよ。僕の彼女の会社の人も呼んであります」

タカ才は隣の席に座りパソコンから視線をこちら側に向けてそう言った。

「今夜か。空いてるな。俺も参加する」

ノボルはジュディの顔を浮かべながらそう答えた。通常アットホームなものは苦手だが、ジュディにもう一度会いたいと思いノボルはそう返事をした。

リビングルームには人がたくさん集まっていた。日本人はノボルを含む4人で後は全部中国人や香港人だった。

「すごい人数だな」

「いやあ、メイリンが結構連れきちゃったんですよ」

タカ才は苦笑しながらそう答えた。

「ああ、紹介します。これが僕の彼女の上杉カナエです。そしてその横は上司のジュディ・チュアです。」

「はじめまして」

カナエはそう言って微笑んだ。長い黒髪に意思の強そうな眼が印象的な古風な美女だった。柔らかい物腰のタカ才とは対象的で、それだからこそ二人はうまくいくのかと妙に納得した。

「俺は藤宮ノボルです。武田の一応上司です」

ノボルはカナエに握手を求めながらそう言った。カナエは少しぎこちない笑みを浮かべたまま差し出された手を握り返した。

「藤宮さん。ジュディ・チュアです。はじめまして」

ノボルが口を開く前にジュディはそう言って手を差し出した。その

視線は鋭く何も言つなという無言のメッセージが含まれていた。

「ジユデイさん。はじめまして」

ノボルはその視線を受け止めると笑顔でそう答えた。

一夜だけの相手。

説明するまでもない。

ノボルもそのつもりだった。

「武田、煙草吸っていいか？」

「ベランダに灰皿置いてあります。寒いですがそうしてください」
タカオはノボルにそう言いながらコートを渡した。ノボルはコートを受け取ると苦笑してベランダにでた。

外は寒かった。

上司をこんな寒いところに出させるなよな。

ノボルはポケットから煙草の箱を出しながらそんなことを思った。

しばらくすると窓の開く音がして、気配を感じた。

振り向くとそれはジユデイ・チュアだった。

ジユデイ・チュアはノボルの隣に立つと煙草に火をつけた。口から煙が吐き出される。煙草を吸うジユデイの顔が恍惚としており誘っているようでノボルは自分が見とれるのがわかった。

「本当、男って馬鹿よね」

自分に見とれるノボルに気づいてため息をついた。

「特に日本人の男なんて。やることしか考えてない」

ジユデイの言葉にノボルは苦笑した。

確かにあたりだ。

自分がジユデイに興味あるのはその体だ。あの夜自分の腕の中で乱れたジユデイを忘れられなかった。

「悪いけど、私は同じ相手と寝るつもりはないわ。しかも友人の彼氏の上司だなんて。最悪だわ」

ノボルはジュディの言葉に答えなかった。ただ苦笑するしかなかった。

始まりは… 3 12月28日

「ノボル…」

甘い声がして唇が触れる。眼を開けるとそこにはジユデイの顔があった。

「ジユデイ」

ノボルは深い口づけを返すとその体を抱いた。

「参ったな…」

目が覚めるとそこは自分の部屋だった。

夢にまで見るとは…

自分のジユデイの体への執着に笑いたくなくなった。

最近女を抱いてなかったせいか。

あの女にこつても執着するのは…

その夜仕事帰りにノボルは行きつけの店に行き、女の子を指名した。

いつものように乱暴に服を脱がせるとその体に触れた。

プロらしく喘ぎ声がノボルを興奮させる。

しかしその目をみた瞬間気持ちかなえるのが分かった。

違う…。

「悪い。やる気がうせた。」

ノボルは女の体から体を起こすとほてった体のまま、財布から札を何枚が出すと女に渡し、シャワールームに入った。

女は無言で床に散らばった服を拾い着替えると、部屋を出て行った。ノボルが利用するのは高級な店で財布を盗んだりする女はいなかった。先ほど渡したのはチップで報酬は女に店から支払われるはずだった。

シャワーから熱めのお湯を出し、頭から浴びる。

くそっつ。

お湯を浴びながらノボルは舌打ちをした。

女の目を見た瞬間、ジュディの瞳を思い出し、あの夜の彼女の肢体が脳裏に浮かんだ。

そしてやる気がうせた。

もう一度抱けば気が治まるかもしれん…

いい体だったから忘れられないだけに違いない。

ノボルはそう決めるとシャワールームから出た。

始まりは… 4 12月29日

「ジュディの携帯番号ですか？」

ノボルの問いにタカオは戸惑った表情を浮かべた。タカオはノボルの女癖の悪さを知っていた。ジュディはカナエの大事な友人だった。ノボルの餌食にみすみすさせるわけにはいかなかった。

ノボルは苦笑すると質問を変えた。

「会社の番号を教えてくださいか？」

「ああ、それなら」

ほっとしたような表情を浮かべるとタカオは電話のメモ取り用の小さな紙に番号を書くとき渡した。

「藤宮ノボルです。ジュディ・チュアさんをお願いできますか？」

ノボルがそう言うとカナエの声がして電話が転送されるときに使われる呼び出し音が鳴った。

「何か御用ですか？」

受話器から不機嫌そうなジュディの声が聞こえた。ノボルはその声を聞くとなんととも言えない思いに包まれた。それは遠い昔に恋をした時に感じたものと似ていた。

「ジュディ、すまないがもう一度会ってもらえないか？」

ノボルは咳払いをして自分の気持ちを落ち着けた後、そう訊ねた。しばらく沈黙が流れ、電話口からため息が漏れた。

「いいわ。いつがいいの？」

そう答えたジュディの声は感情を読み取れない冷たいものだった。

「今夜は空いてる？」

ノボルはその声で萎える気持ちを奮い立たせてそう聞いた。

「空いてるわ。場所はこの間のバーでいいでしょ？」

「ああ。時間は8時でいいか？」

「ええ」

こうしてノボルはジュディと8時にバー出会うことになった。

バーに入るとすでにジュディは来ていて、ノボルを見ると手を上げた。ノボルは笑顔を向けるとジュディの横に座った。

「誘いにのってくれてありがとう」

ノボルは思わずそう言った。それを聞いたジュディは苦笑を浮かべた「で、用は何なの？」

ジュディは前回と同じように小さなグラスを手に持っていた。

「正直に言う。もう一度抱かせてくれ」

ノボルの言葉にジュディは目を丸くした後、笑い出した。その目には笑いすぎて涙が浮かんでる。

「あなたみたいな欲望丸出しの人みたことないわ。まあ、遠まわしに言われるよりはましだけど」

「俺はあんたを忘れられない。もう一度抱いたらきつと忘れられる。」

ジュディはノボルの真つ黒な瞳を見つめた後、妖艶に微笑んだ。そしてその唇に軽く触れた。

「いいわ。あなたとは相性がよさそうだし」

ノボルとジュディはあの夜と同じようにホテルに行き、互いの体を温めあった。しかし違ったのはお互いに身分を知っているということだった。

ノボルはジュディの横に寝ながら、天井を見上げた。体が火照っていた。何度も体を重ねたはずなのに、まだ体は足りないようだった。

ジュディはノボルに背中を向けていた。

ノボルがジュディの肩に触れるとわずらわしそうに手を振り払った。

「もう十分でしょ。私は疲れたわ。寝かせて」

「なあ、少し話しないか？俺はあんたのことが知りたい」
「…いいわ」

ジユディはそう答えると寝返りをうち、ノボルを見つめた。

宝石みたいな瞳だな。

ノボルはジユディのきらきら輝く瞳をみてそう思った。

「あんたは何で日本語がそんなに流暢なんだ？」

「ああ、日本に留学に行っていたのよ」

そういう質問と答えから始まり、二人はお互いのことを話し始めた。

「なあ、ジユディ…。俺はやっぱりあんたが忘れられそうもない。
会ってくれないか？」

「嫌よ。これが最後。セフレっていうんだっけ？そういう関係は嫌
なの。私だって恋人くらいほしいわ。本当あなたも部下を見習って
誰かを好きになったほうがいいわよ」

ジユディはそう話すとベッドから腰を上げ、シャワールームへ向か
った。ノボルはシャワールームから聞こえる水音を聞きながらベッ
ドに大の字に横たわった。

「好きになるか…」

それはずいぶん前に忘れた感情だった。

始まりは… 5 12月30日

「藤宮さん、昨日ジユデイと会ったんですよ」
会社に着くなりタカオが興味ぶかそうに聞いてきた。

「ああ、一緒に酒を飲んだ。いい女だよな」

ノボルはそう答えると自分の机に座り、パソコンの電源を入れた。
タカオはそれ以上の質問はできないと悟り自分の席へ戻った。年末
で別の日本人スタッフが帰国していた。やる事が結構たまっていた。

今朝方までジユデイと一緒にいた。ほとんど寝てないはずなのに頭
がなぜかすつきりしていた。

体にまたジユデイの肌の暖かさが残っているようだった。

恋人か…

まあ、普通はそうだよな。

ノボルはここ数年恋人を言われる存在を持ったことがなかった。
周りの女性は皆、体だけの関係だった。

自分がジユデイに対して持っている感情は、恋人に持つ感情とは違
う。ジユデイもそれがわかるのだろう。だからこれが最後だと言っ
たのだろう。

ノボルはそう決めつけると机の上に山積みになっている書類に目を
通し始めた。

「明日どうするんですか？」

昼食を一緒にとりながらタカオがそう聞いた。

「ああ、家で紅白でもみる。NHKを入れてるからな」

「NHK入ってるんですか？いいなあ。僕も行ってもいいですか？」

「いいけど。彼女も来るのか？」

「いや、彼女はジュディと年末パーティーに参加するみたいですよ」

「そうか」

彼女と仲がいいタカオにしても珍しいと思いつつもノボルはうなずいた。

夕方、明日の買い物のため日系のスーパーに立ち寄った。そこでノボルはジュディを見た。若い男と腕を組んで楽しげに買い物をしていた。

恋人か…

心に宿る不思議な感情をもてあましながら、ノボルはジュディたちのいる野菜売り場ではなく、別の売り場移動した。

なんだかいらいらする。

腕を組んで楽しそうに笑うジュディの顔が頭から離れなかった。

結局、むしゃくしゃしてしまい、タカオしかこないはずなのにパーティーを開くかごとく食料品や酒を買い込んだ。

まあ、あいつも飲むほうだからいいか。

ワインや日本酒を抱え、車に戻りながらノボルはそう自分を納得させた。

しかし、頭の中はジュディとその恋人の並ぶ姿でいっぱいだった。

「この人、私の恋人なの。あなたとは所詮体だけの関係。もう十分でしょ？」

ジユデイはそう微笑むと男の腕を掴み、ノボルに背を向けた。

「！」

ノボルはベッドから起き上がった。真つ暗な部屋にいる自分に気づき、時計を見る。時間はまだ午前2時だった。

くそっ。

馬鹿な夢をみた自分が許せなかった。

ティーンエイジャーじゃあるまいし…

ノボルはキッチンに行くと、食器棚からグラスと取りウィスキーをついで一気に飲んだ。

始まりは… 6 12月31日

目が覚めるとすっかり日が昇っていた。

今日は休みにしておいてよかった。

そんなことを思いながらコーヒーマーカーに粉をいれスタートボタンを押す。

熱湯をまず沸かす音が聞こえ始めた。

キッチンにある小さな椅子に座って、新聞を読んだ。

ノボルのいつもの行動だった。

しかし、なんだか調子がおかしかった。

ジユデイと寝る前はそんなことはなかった。

気分にもらがある。

しかも変な夢をみる。

ノボルは舌打ちをするとテレビをつけた。

NHKが映し出される。

ノボルが見るのはもっぱらNHKだった。

広東語も中国語もわからないので現地のドラマなど見たこともなかった。

しばらく見ているとニュースが終わり、今夜の紅白歌合戦の宣伝を兼ねた番組が始まった。

出演するメンバーをみても、知っている歌手が少なくなっていることに気がつき苦笑した。

俺も年か…

海外にいと日本の歌を聴こうとしないと聴く機会に恵まれない。だから紅白で聴く歌は初めてのものが多かったりする。

武田あたりが見たら分かるのか…

ノボルは背伸びをすると今夜のために片づけをするために歩きだした。

「武田？あー今日は来ない？気にするな。」

午後5時ごろになってそうタカオから電話あった。準備をしてあったのだから、まあ大方彼女と過ごしたくなっただらうとノボルは電話を切った。

去年はどう過ごしたんだっけ？

ああ、去年は日本から友人が来ていて街の飲み屋で年明けを迎えたっけ？

まあ、楽しいといえば楽しい年明けだったよな。

今年はのんびりと過ごすか…

ノボルはそう腹をくくってリビングルームに酒の肴やグラスを並べ

ていく。

一人で飲むのは慣れていた。

夜寝るときに女がいたほうがいいが、あとは面倒なだけだった。

しかし、あの女…

ジユディは面白い女だったな。

いろいろ楽しい話をする…

性格が男らしく、さっぱりしており、物事を数字で考えるジユディがノボルにとっては新鮮だった。

ジユディとなら寝る以外一緒にいても楽しいかもな。

テレビをぼんやり見ながら、そんなことを考える自分に気づき、ノボルは苦笑せずにいられなかった。

紅白歌合戦が始まった。

まず若手の歌手が歌い始める。

辛うじて知っている歌手だったが、歌を聞いてもわからなかった。

やっぱりさっぱりだな。

ノボルはキッチン行くとビールを取り出す。

寒いと言ってもビールで飲み始めるのがノボルの飲み方だった。

ビールを冷蔵庫から取り出すと、インターフォンがなる音がした。

ノボルが住んでいるのは高級住宅で守衛がいるので不審な者は入って来れないはずだった。

武田か？

扉を開けるとそこには不機嫌そうなジユデイの姿があった。

「あんた、なんで？」

ノボルは目を見開いてジユデイを見つめた。

幻覚としか思えず目を何度か瞬かせる。

しかし、ジユデイはそこにいた。

「中に入ってもいい？寒いんだけど」

「ああ、どうぞ」

驚きのままノボルはジユデイを家の中に入れた。

「はあ、本当寒いわね」

ジユデイはそういいながらコートを脱いで壁に掛けた。

ノボルは呆然としながらも、タカオが急に約束をキャンセルしたことなどを考え、ジユデイがここにいるのはタカオが一枚噛んでいることを想像できた。

「えっと、今日は年末パーティーに参加するんじゃないかっただけ？」

「ええ、そのつもりだった。でもここに来ちゃったわ」

ジユデイは悪戯な笑みをノボルに向けた。

「悔しいけど、私、あなたを好きになったの。自分の気持ちに気づいたから言いに来たの。だって、気持ちを抑えるのって耐えられない。体だけの関係になる気はないけど、今日は私の気持ちを伝えにきたのよ。」

ジユデイは力強い瞳でノボルを見つめたまま、そう言った。ノボルはその瞳に囚われながら黙ってジユデイの言葉を聞いていた。

自分の気持ちが形をとったのはわかった。そして、ここ数日自分の調子を狂わしているもの何かわかった。

「俺も悔しいけど好きになったみたいだ。悔しいが、あんたの体だけじゃなくて、あんたと一緒にいたいと思う」

ノボルがそう言うとジユデイは明るい笑顔を見せた。

「じゃ、今日から私たちは恋人同士よね？」

「ああ。だから今の彼氏とは別れるよな」

「彼氏??」

「昨日、スーパールで見たぞ。」

「ああ、あれね。弟よ。ハンサムでしょ。私に似て」

ジユデイの答えにノボルは気が抜けた。弟だなんて思いもしなかった。でもそのおかげで自分の気持ちさがさらに深まった気がする。

「焼いたの?ノボル？」

ジユデイは上目遣いでノボルを見る。目つきが色っぽく、そのつややかな唇が誘っているようでノボルは気分が高揚するのが分かった。

「ああ、焼いた。そして今あんたを抱きたい。いいか？」

「…ああ、もう。いいわよ」

ジユデイがため息混じりにそう答えるとノボルはその唇に自分のものを重ね、その体を抱きかかえた。そして寝室へ向かう。

テレビからは懐かしいメロディが流れ始めた。

今年も紅白は最後まで見れないな。

そんなことをノボルは思いながらも愛しい人をベッドにゆっくりと下ろした。

「そうだわ。もし他の女を抱いたりしたら、その女を殺した後、あなたも殺すからわかってるわね」

「ああ、わかってるさ」

ジユデイのきらきら輝く瞳に見とれながらノボルはそう答えた。そして口づける。

他の女なんて抱くわけがない。

俺にとってジユデイが最高の女なんだから。

開けっ放しの扉の向こうから除夜の鐘が聞こえ始めた。
どうやら紅白歌合戦が終わり、除夜の鐘を突き始める放送が始まっ
たようだった。

ノボルは年が明けるのを感じながらもジューディの体におぼれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8983p/>

始まりは...

2011年7月13日12時10分発行